



ふあせるたむら
店長 新田 耕弘 さん

「ふあせるたむら」は平成 27 年、現在の船引町船引字遠表に移設し、規模を拡大、登録者数も 2 倍以上になりました。

でも、農業者が減っていく今後は、現在の規模を維持するのは難しくなっていくことが予測されます。お客様に安定して農産物を供給するためには、農業を経営する意識を農業者に広めていくが必要になるのではないのでしょうか。

Voice



1 日 500 組以上のお客さんが訪れる「ふあせるたむら」



直売の魅力

新鮮で、旬のものが豊富

まずは、実際に直売所へ行き、お客さんや運営者に話を伺いました。市内で最も大きい直売所「ふあせるたむら」（以下「ふあせる」）では、お客さんに直売所の魅力を尋ねました。

ほとんどの人が答えたのは、やはり「農産物が新鮮」であること。

また、二本松市から訪れたという夫婦は、「旬のものがたくさんあるのいいね」と、買い物袋からシソの葉を見せてくれました。

生産者が知り合い

大越町の「おおごえふるさと館農産物直売所」（以下「ふるさと館」と船引町の「旬菜かたそね」（以下「かたそね」）では、「生産者が知り合い」であることも挙げられました。知人が生産した農産物には、安心感を覚えるのでしょうか。

「ふるさと館」を運営する大越町直売所運営管理組合長の清野信雄さんは、「おおむねお客さんは組合員と顔見知りで、おしゃべりすることもあるの楽しみのなっている」と言います。直売所が地域住民の交流の場としても機能しているのです。



直売の課題

後継者がいない

しかし、市内の直売所に大きな課題があります。後継者不足です。

「かたそね」の会員は、50 代から 70 代までの女性です。代表の根本君江さんは、「会員が元気なうちはいいが、いつまで続けられるか」と心配しています。

「ふるさと館」の組合員も 50 代から 80 代までですが、元気に活動しています。清野組合長は直売所の今後について、「地域の皆さんが活動を表現できる場所でもあるので、少しでも長く続けたい」と言います。

農業者の高齢化・減少

「ふあせる」店長の新田耕弘さんも、農業者の高齢化と減少を危惧しています。農作物の量・種類が減少し、直売所ひいては地域農業の衰退につながるからです。

新田店長は「農業を始めるには、ある程度の資金が必要です。安定した収入を得るのも簡単ではないので、やはり若い人は敬遠します。就農には J A や行政からの支援も必要ですが、農業者も自ら農業に対する誇りと経営感覚を養わなければならないのでは」と指摘します。



弁当や総菜も作っている「旬菜かたそね」。右から 2 人目が根本さん。



大越行政局に隣接する「おおごえふるさと館農産物直売所」。右から 2 人目が清野さん。

直売から考える地域農業

地域の生産者が、自ら生産したものを、地域の消費者に、自ら売る。

直売は、昔から行われてきた売買の形です。

しかし、流通網が発達し、大量生産・大量消費社会を迎えて久しい現在、直売が改めて注目されています。

田村市の直売の事情から、地域農業の今後を考えます。

